

ヨシュア記 24 章 14-25 節 「主に仕えます」

モーセの後継者として立てられたヨシュアは、約束の地カナンに入り、そこに住んでいた人々と戦い、その地に定着していきました。24章は、ヨシュアがイスラエルの民を集めて語った遺言と、彼が死んで葬られたことが語られています。ヨシュアが最後にしたこと、それは25節「その日、ヨシュアはシケムで民と契約を結び、彼らのために掟と法とを定めた」とあるように、契約を結びました。出エジプト記の「シナイ契約」として与えられた約束が「十戒」です。本日の箇所では、「シケムの契約」と呼ばれます。その内容はシナイ契約の再確認です。シケム契約でまず語られたこと、それは主がこれまでイスラエルに与えてくださった数々の恵みでした。

その恵みに応えて生きることが、イスラエルの民に求められています。ヨシュアは14節で語っています。主を畏れ、真心を込め真実をもって主に仕えること、それが契約の恵みを与えられた神の民のなすべきことだ、と。十戒とは、神の契約の民となるための条件ではありません。主なる神が恵みによってイスラエルの民を選び、救い、契約を結んでご自分の民としてくださった、その恵みです。この恵みに応えて、主を畏れ、真心を込め真実をもって主に仕えていくところに、十戒を中心とする律法があるのです。つまり聖書における信仰は、神の救いの恵みが先に与えられ、それに対する感謝の応答として人間は良い行いをしていく、というもののなのです。その主の恵みへの感謝の応答として、ヨシュアが民に求めていることが、「あなたがたの中から他の神々を除き去れ」ということでした。自分が仕える神を自分で選び取る。人間が神を見比べてどれかを選ぶというのではありません。神を信じ、仕えることにおいては、どっちつかずということは許されない、ということです。そしてヨシュアは、あなたがたがどの神を選ぼうとも、私と私の家は主に仕える、と宣言しています。イスラエルの民たちが迫られたシビアな選択と同様に、私たちも何度もシビアな選択に迫られる時があります。その現実の中で、ヨシュアは「わたしとわたしの家は主に仕える。あなたがたはどうするのか」と問い掛けているのです。

主なる神の契約の民として主に仕えるとは、契約によってご自分の民との人格的な関係を結んでくださる神と共に生きることです。その関係は、自分の願いが叶うかどうかによって成り立つものではありません。相手愛すること、信頼関係を築くことが求められます。相手に対して誠実であることが大切であり、不誠実なこと、相手を裏切り傷つけることは罪として問われるのです。「主を畏れ、真心を込め真実をもって彼に仕え」なさいというのはそういうことであって、主なる神に対する誠実さを求めているのです。イスラエルの民は、ヨシュアのそういう求めに答えて、「わたしたちも主に仕えます。この方こそ、わたしたちの神です」と言いました。イエス・キリストは、私たちが願うことさえ出来なくなって絶望するときにも、十字架上で祈っておられるお方です。この主イエスを救い主キリストと信じる信仰によって、主イエスとの人格的な交わりが与えられ、大切な祈りの交わりによって育まれているのです。「わたしとわたしの家は主に仕えます」という人格的な関係を、これからは神さまと築くことができますように。